

平成 26 年 12 月 9 日

学位請求論文（論文博士）審査報告書

学位請求論文：抑圧と無意識の主体の倫理

学位請求者：専修大学兼任講師

氏名 小長野 航太

審査委員

主査 伊吹 克己

副査 船木 亨

副査 磯村 大

本論文はジークムント・フロイトが創出した精神分析理論が示した基本的概念の一つである抑圧 *Verdrängung/refoulement* 理論を検討するものである。精神分析におけるもっとも基本的な概念と言っていいこの理論を取り上げる理由は、論者の小長野航太氏によれば、あまりにも基本的なものであるが故に、それ自体が検討されることは決して多くなかったという点にある。

まず第一部においては、フロイトにおける抑圧理論の変遷が取り扱われる。彼は始めからこの抑圧と呼ばれる現象を直観していた。だが、それをうまく理論化することができない。論者によれば、その理由は、フロイトの発見したもの、つまり彼がヒステリー者の語りのうちに聞きとったものが、ひとつの知を形成するのに非常に厄介なものだったからである。

それでもフロイトは、抑圧理論をメタ心理学的なしかたで提出しようとした。最初の試みは『夢解釈』(1900)の第七章である。しかし、メタ心理学的理論の狙いとは裏腹に、フロイトは抑圧を明快に示すことができない。それどころか、性的なものが抑圧されるという仕組みをほとんど説明できなかったと言っていい。筆者はその理由を、フロイトの発見したもの、すなわち無意識の性質と『夢解釈』時の欲望概念の齟齬という観点から検討している。(第一部第一章)

この失敗を経て、フロイトは1915年に再びみずからの理論のメタ心理学的な構築を試みる。このとき、抑圧は、『夢解釈』のときとは違うしかたで、つまり仮説として提出された欲動の運命として

理論化された。(第一部第二章)

他方、フロイトにはメタ心理学的理論として括られるものとは別の理論があった。それがエディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスに関する理論であり、フロイトに関してはこちらのほうが一般に浸透した理論であると言える。とはいえ、これらの理論についての誤解も多い。それは、フロイトの言う性的なものに関するものであるように見える。本論文では、これらを「実践的理論」と呼んでいる。この論文の独創性の一つは、それをメタ心理学的理論と区別することでフロイト理論の正確な読みかたを提出した点にある。(第一部第三章)

本論文では、フロイトが症例研究において、出自の異なるこの二つ理論をどのように扱っているか、そこに生ずる困難をどのように考えたのかを、オオカミ男症例を具体的に見ながら検討されている。(第一部第四章)

第二部においては、フロイト理論を引き継いだジャック・ラカンが抑圧理論をどのように再構築したかが問題になる。ラカンは、オオカミ男症例を取り上げながら、抑圧を言語活動と結びつけて再構築した。そのさい、フロイトがメタ心理学的理論と実践的理論という両方の観点から説明するために導入された「事後性」という概念を、言語活動のはたらきとして捉えなおしてみせた。また、抑圧を言語活動と結びつける過程で、ソシユール言語学を出自とする「シニフィアン」概念が彼独自のしかたで練り上げられている点が議論されている。それによって、言語活動にかんして「欲望」というコンテキストからアプローチすることが可能となった。ラカンは、抑圧を、言語活動における欲望の観点から、大他者の欲望にかんして象徴化されえないものが生ずることの現象として理論化しなおしたのである。(第二部第一章)

ところで、ラカンによる再構築は、フロイトのものとそれほどかけ離れたものだろうか。それについて検討するために、論者はラカンによる抑圧理論の再構築をもう一度フロイトの議論に送り返す。ここでは、フロイトのメタ心理学的図式とラカンのシニフィアン連鎖の関係性が探求されている。この議論から、ラカンによる抑圧が「シニフィアン連鎖」から主体が脱落するという現象のことであることが明らかになる。(第二部第二章)

第三部は、抑圧を認めると、言語活動に関するある通念が壊されるという点がまず示される。これは言語活動における真理の問題である。抑圧を認める立場からすると、話し手が嘘偽りなく語っていることであつたとしても、分析家がそれについて「そこに抑圧がはたらいている」と解するならば、その言表は真理ではなくなってしまう。この事態が、言語活動において真理をどのように捉えるかという問題を再検討することに結びついた。これは、ハイデガーが真理概念を考察したときの議論と交差する。ラカンが抑圧理論を再構築するのに参照としたのもまた、ハイデガーであつた。この点に基づいて、ハイデガーにおける真理と言語活動、彼の術語を用いるなら、「ロゴス」の概念との関係が示されている。(第三部第一章)

ラカンによる抑圧理論の再構築は、シニフィアン連鎖の「執存」とそれと相関的にある「脱存」という言い回しに凝縮されている。これによってどのようなことが語られているかを、ハイデガーの

術語を検討しながら、明らかにされる。この検討によって、欲望の観点から理解された言語活動においては、大他者の欲望の知を象徴化できないので、主体がその言語活動から脱落してしまう。そこで言語活動において露わにならない領域が形成される。これが抑圧の構造である。

このとき、このような言語活動の構造は、われわれが通常おこなっているような言語活動による知の伝達について、新たな問題を提起する。言葉を正しく用いさえすれば、知を真理のまま伝達することができるのか、という問題である。ラカンによる抑圧理論の再構築は、言語活動において、知られざる知のあることを示した。それは、知の伝達に主体的出来事のかかわる知の伝達である。たとえば古代において、プラトンが教育することの困難に遭遇したとき、問題になっていたのは、実はこの類いの知をどう扱うかということであった。こうしたことが示されている。(第三部第二章)

ラカンは抑圧を、欲望の観点からみた言語活動において主体が脱落することであると見た。そうであるなら、語る存在であるわれわれは、この抑圧を免れることはできない。それならば、精神分析は、このときなにをおこなうのか。この問題にたいし、ラカンは四つのディスクールというマテームによって答えようとした。ここでは、それがどのようなマテームであるかが説明されている。本論文において、ラカンの示した「四つのディスクール」のこの説明は、平易で、また核心を突くものであり、高く評価できる。(第三部第三章)

ラカンの四つのディスクールのマテームは、第二章において提出された問題、つまり主体的出来事に関わる知の伝達、あるいは知の創造というものがどういうものであるかという点に関して、考える契機を与えてくれる。ここでの「四つのディスクール」の理解においては、本稿第一部第一章と第二章において見たフロイトのメタ心理学的理論の変遷をこのマテームで読みなおすことが提案されている。フロイトの提出する知は、主体的出来事を経ることによって、その知に対して自らがつねに倫理的態度を取りつづけることによってのみ存続するたぐいの知であることが示される。そのような知を伝達することに関して、何が重要であるのかということが議論される。(第三部第四章)

以上の考察によって本論文は、フロイトの創設した精神分析もまた、ヨーロッパ独自の「思想」の営みのひとつであることを、知の伝達という観点から、明らかにしている。

以上のような小長野航太氏の議論は、精神分析と哲学史に関する広範な知識に基づき、その明快な文章と相まって、確実な論理構成で組み立てられている。「抑圧」という、精神分析において最も基本的な概念を検討することを通して、論者は哲学史の文脈の中に精神分析という領域を異にする知を導入する。それは結果として、哲学そのものの文脈の中に精神分析理論を位置づける作業となっている。審査員一同は、この点をまず高く評価した。また、精神分析理論自体の議論では、フロイトとラカンにおける「抑圧」理論の異同が明快に述べられている。その意味で、これは可能性のある議論を行っていると思われられるものである。別の仕方而言えば、小長野氏の示した議論は、発展性を秘めた議論の土台をはっきりと示したとすることができる。

難を言えば、精神分析の示す精神病理学的な地平と、哲学がとりあつかう普遍的な知の地平とのつながりをもっとはっきりと示すべきであったし、フーコーなど同じような問題を取り扱っている現代の思想家との異同の問題を示すべきであったとも考えられる。しかしながらそうした問

題は、今回示された議論の延長上において十分に示すことができると判断でき、その限りで本論文は将来性のある議論を提出した。

「抑圧」という、精神分析理論にとって基本的な概念を取り上げて、その議論の場から、従来の精神分析理解の刷新を迫る氏の試みは十分に博士論文として評価することができる。以上により、審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。